

漢語方言における重畳型形容詞接尾辞の“子”について

大 西 博 子

0. はじめに

“子”は現代中国語（以下漢語と称す）の標準語である「普通話」では、名詞、量詞、動詞、形容詞に後続し、名詞を形成する機能を有する接尾辞であるが、形容詞の重畳型に後続し、副詞や状態形容詞を形成するという機能は持たない。例えば、“胖”（太っている）“乱”（乱れている）などの形容詞に後続し、“胖子”（太っている人）“乱子”（騒乱）といった名詞は形成できるが、“慢”（速度が遅い）“红”（赤い）などの重畳型に後続し、“慢慢子”（ゆっくりと）“红红子”（赤っぽい）といった副詞或いは状態形容詞を形成することはできない。こうした重畳型形容詞は通常“儿”と表記する接尾辞が伴う。しかし漢語方言、特に南方方言においては、普通話には見られない“子”の重畳型形容詞に後続する用法が多数地点において分布している。本稿では、漢語方言における重畳型形容詞接尾辞“子”（以下“子”尾と称す）の地理的分布を観察することを主たる目的とし、“子”尾と文法機能や意味の上で同類の接尾辞と見なせる“儿”尾¹⁾との対照比較を通して、“子”尾の文法的特徴も論じてみたい。

1. 対象語形と分類方法

1. 1 対象語形

重畳型形容詞には、単音節形容詞からなるタイプと二音節形容詞からなるタイプがあるが、本稿では単音節形容詞からなる重畳型を考察の対象とし、その末尾に付加される形態素を対象語形とする。

普通話では単音節形容詞の重畳型“AA”は、通常“AA儿”という交替形をもち、文中においては状語になる機能しかもたない副詞である。しかし末尾に“的”を伴うと状態形容詞に変化し、状語のほか、定語、補語、謂語にもなる（朱徳熙 1982）。よって“AA”に後続する形態素は、その文法的機能から、副詞接尾辞とも状態形容詞接尾辞とも扱うことができるわけだが、本稿では重畳型形容詞に後続するという造語法的特徴から、一律に「形容詞接尾辞」と扱うことにする。

1. 2 分類方法

単音節形容詞の重畳型は、漢語方言において普遍的に分布しているが、その末尾に現れる形態素には、実に様々な漢字表記が当てられている。これらの表記(以下語形と称する)は、その音声的特徴から11のグループに分類できるが²⁾、各語形の分布状況を声母別に見ると(表1)、声母は異なるが韻母が同形であったり、複数の声母の類に同一の漢字表記が分布していたりすることに気付く。例えば[s]と[z]の二声母には、/l/の単母音のみで構成される語形が分布しているが、その形態的特徴から同源の語形に帰属できると判断できる。また“地”のように[ts][n][l][t]と複数の声母に分布している語形は、韻母音形と音韻的帰属から、すべての語形ではなく、一部の語形にのみ同源である可能性が見出せる(拙論2004)。つまり分布語形の中には、音形は異なるが、音韻的には同一の語形に帰属できるものもあり、同一語形の“変体”(変異形)と見なせるものも多数含まれていると言える。よって、音声から単純に語形分類するのは、語形の祖形を求める上では意味を持たない。むしろ、語形の音韻的帰属や表す機能・意味といった音韻学的、文法的側面からのアプローチを加えた上で分類を行い、同源或いは同類の語形同士で音声比較を行う方が、理にかなった分類方法ではないかと考える。事実[tɕi]の音形で示される漢字語形は、贛方言や湘方言において指小的意味を持つ名詞接尾辞で、現代漢語の“子”尾に概ね相当する³⁾。音韻学的にも“子”の『広韻』反切“即里切”に合致し、“子”尾に相当する語形と分析できる。また“嘸”の漢字語形も、客家や贛方言において“子”尾に相当する語形であることから⁴⁾、“子”尾と同類の語形と扱える。これらは音声上異なるグループに分類できるが、音韻や文法的特徴からは“子”と同類の語形に分類できる。このような観点から、本稿では“子”と表記される語形だけでなく“子”尾と同類と扱える語形も対象とし、分類を行うことにした。

表1 語形の音声別分類(大西2006より抜粋 一部改正)

類	漢字表記	韻母音形
[ts]	子崽仔则地叫经口姐	ɿ i i ie iŋ u ɯ ai a ā æ? ə ə? e ei e? ε et ək ɤ
[tɕ]	唧口机几积记	i
[tɕ·]	叫交	io io iə
[s]	斯嘶式是势似	ɿ ɿ i
[z]	子氏时似	ɿ i
[n]	地咧呢	i ie ie ə ε
[n·n]	能当南龙论宁	aŋ eŋ ən iŋ ien
[l]	仿里哩口若若势式地咧佬	i ie ei ei? ɤ ɛ ɯ ə? ɯ ə? au
[t]	得口得的口的地口地底 endpoint	i ɿ ik it i? iə? e ei ek ək et e? ə? i iu
[k]	格咯家干个介口敢仔公	ɛ ɤ əu ou o a ə a an an əm iā ən
[m·r]	儿尔	i ie ə ŋ ŋ r

2. 語形分類と地理的分布

本稿で扱う“子”尾には，“子”と表記される語形の他，“仔，崽，圪”に由来する語形も含む。“子”尾の分類に関しては，拙論(2006)で述べてはいるが，その後入力データの増補によって新たな分析結果が生じたため，本稿はその増補修正したものとして発表する。“子”尾は声母の違いから，8つのグループに分類できる(地図1)。各グループに属する語形と分布地域は以下の通りである。語形は漢字表記，声母，韻母の順で記し，分布地域は省名で，分布数の多い順から示した。発音表記は国際音声字母(IPA)を使用し，声調は正確な調値が分かるもののみ，音声表記の右肩にアラビア数字で記した(0は軽声を意味する)。尚，各グループの所属語形の音形と分布地点については，末尾資料を参照されたい。

2. 1 [ts-]類

漢字表記	子 仔 兹 啣 崽 者 嘖 则
声母	[ts]
韻母	[ɿ][i][il][u][ʉ][ə][ei][ai][e][ɛ][ɛ][æʔ][əʔ]
分布地域	江西 湖南 江蘇 福建 寧夏 山西 甘肅 上海 浙江 四川 陝西

各語形のうち[ɿ][i][il][u][ʉ][ə][ei]韻母は中古音の之韻に，[ai][e][ɛ][ɛ]韻母は哈韻に帰属することから，前者は“子，仔”，後者は“崽”に祖形を求めることができる。江西宜豊の“子”は[tsu²¹²]と[tsə⁰]の二音あるが，指小辞的に使われる場合は，後者の音形が用いられる(宜丰县志 p.766)。このように“子”が複数の音形を持つという現象は，宜豊に限られたことではなく，客家，贛，湘方言などでは普遍的に見られる。尚，江蘇丹陽の“则”[tsæʔ⁵]は，[tsɿ]の促音化形式(ɿ>æʔ)であり，名詞接尾辞の“子”と同形である。

“子”の反切を見ると，『広韻』では“即里切”，『集韻』では“祖似切”とある。両者に対応する現代音は[tcɿ]と[tsɿ](いずれも上声)であるが，“即”と“祖”はいずれも精母に帰属することから，現在[tcɿ]声母で読まれる語形は“子”[tsɿ]の口蓋化したものと分析できる(ts>tc)。

“仔”は『広韻』では二音あり，一つは“即里切”，もう一つは“子之切”で，いずれも精母之韻に帰属するが，前者は上声，後者は平声に属する。現在，福建武平や広東翁源では[tsɿ]が陰平に読まれるが(翁源では“兹”の字が当てられている)，これらは“仔”の“子之切”(平声)に由来するものと思われる。ただ“仔”の義注は，『広韻』で“《说文》克也”，『集韻』においても“《说文》克也，一曰仔肩，任也”となっており，現代漢語に見られる“幼小的”といった意味は見られない。いつから“子”と同義の形態素として使われるようになったかは，未だ不明である。

“崽”は『広韻』では二音（山佳切，山皆切），『集韻』では四音（子亥切，所佳切，山皆切，想止切）あるが，現代音では『集韻』の“子亥切”に由来する音形しか見られない。しかし『広韻』の義注に“《方言》云，江湘間，凡言是子謂之崽，自高而侮人也”とあることから，“崽”が中古の時代から，所謂“江湘間”の地域において，“子”と同義の方言字として用いられていたことは確かといえる。

2. 2 [tɕ-]類

漢字表記	子 仔 啣 几 叽 叽 积 记 经 忌 叽 叫
声母	[tɕ][tʃ][dʒ]
韻母	[i][iŋ][ie][ei]
分布地域	湖南 江西 浙江 安徽

“子 仔 啣 几 叽 叽 积 记”の漢字語形は，すべて[tɕi]の音形で読まれる。これらは上述した通り，[ts]の口蓋化音と分析する（ts>tɕ）。広東陽江では舌葉音[tʃ]に読まれ，浙江雲和ではさらに“儿化”し，浙江永康では有声化している。湖南益陽の“叽”，湖南宜章の“仔”，安徽績溪の“叫”は，漢字表記こそ異なるが，いずれも[tɕie]と発音する。その韻母の音形から，“即里切”の中古音に由来する語形と分析する（*ie>ie⁵）。尚，益陽では，“叽”は“子”[ts]の白話音と見なされている⁶⁾。

2. 3 [t-]類

漢字表記	子 仔 得 啣 端
声母	[t]
韻母	[ɛ][ɤ][e][ə][æʔ]
分布地域	江西 湖南 湖北 浙江 江蘇

これらの語形は韻母の音形から，“子”或いは“崽”に由来すると分析する。江西都昌では，“子”の単字音は[ts³⁵]であるが，名詞接尾辞には“啣”[te⁰]の表記が用いられる⁷⁾。江西安義や修水においても同様に“子”のこうした“変体”（変異形）がいくつか存在するが，その分布状況は様々で，安義では“子”の単字音（子），名詞接尾辞（N子），重疊型形容詞接尾辞（AA子）のそれぞれに，異なる語形が用いられている（表2）。名詞接尾辞には[li⁰]と[ts⁰]の二語形が分布しているが，[li⁰]の方が[ts⁰]よりも生産性が高い。尚，安徽建徳に“端”が分布するが，その音形[te⁴²³]は，江西や湖北に分布する“得”や“啣”と同形であるゆえ，同類語形と分析した。

表2 江西都昌, 安義, 修水3地点における“子”の変異形式

	子	N子	AA子
都昌	tsɿ ³⁵²	tɛ ⁰	tɛ ⁰
安義	tsɿ ²¹³	li ⁰ / tsɿ ⁰	tɛ ⁰
修水	tsɿ ³¹	tsɿ ⁰	tsɿ ⁰

2. 4 [s-]類

漢字表記	式 勢 斯 是 似
声母	[s][ʃ][ç][ʃ]
韻母	[ɿ][ɿ][i][iʔ]
分布地域	湖北 江西 湖南 浙江 広東

[s]以外の無声摩擦音声母[ʃ][ç][ʃ]も含む。“斯”や“是”は中古音の支韻に帰属するが、現代音では之韻と支韻は合流し同音化しているの、これらは之韻に由来するものと分析して問題はなかろう。[s]は[ts]の弱化形式で、さらにそり舌化した[ʃ]や口蓋化した[ç][ʃ]も分布する。“式”と“勢”は、湖北東部の“楚語”と呼ばれる地域に集中して分布しており、[sɿ]や[sɿ]の音形で発音される。漢字表記は異なるが、その音形から“斯”や“是”と同源と分析する。また江西信義や石城には“似”が分布し、音声表記は付されていないが、単純にその音韻的帰属（之韻上声）から、“子”の弱化形式と分析した。

2. 5 [z-]類

漢字表記	子 氏 似 时
声母	[z]
韻母	[ɿ]
分布地域	浙江 広東

広東平遠の[zɿ]は、“子”[ts]の弱化形式である⁸⁾。このことから呉方言に分布する“氏、时、似”の漢字語形も、すべて“子”の弱化形式と分析した。“似”は浙江温州では、[s]ではなく、その有声化した[z]で読まれる。黄岩では“氏”と“时”が分布するが、声母と韻母は同形である。接尾辞のような“封闭类词”に属する形態素は、単独では機能しないため、声調は往々にして轻声化し、本来の調値や調類が分からなくなっている場合が多い。“氏”と“时”は声調こそ異なるが、これは調査者の記録形式の違いによるもので、同一の語形と分析する。

2. 6 [l-]類

漢字表記	伢 哩 咧 式
声母	[l]
韻母	[i][æ][e][i?][ei?]
分布地域	江西 福建

これらの語形は、2.3 で分類した語形と同様“子”の変異形と見なす。福建長汀では“哩”と“咧”が分布するが、これも調査者の記録形式の違いによるもので、音形は同じである。また長汀の名詞接尾辞には、“子” [tsɿ²⁰]と“哩” [le^{50~20}]があり、前者は文言音、後者は白話音と見なされている⁹⁾。福州に分布する“式” [lei²⁴]は、漢字表記からは[s]類に分類できるが、その音形から[l]類に分類する¹⁰⁾。

2. 7 [n-]類

漢字表記	仔 呢
声母	[n]
韻母	[a][e]
分布地域	福建 広東 江西

福建安溪では“仔” [na⁵²]が分布しているが、その音形及び文法機能から、福建泉州に分布する“仔” [a⁵⁵]と同源と分析できる¹¹⁾。広東焦嶺では漢字表記は付されていないが、名詞接尾辞の“子”と同形である¹²⁾。また江西全南や樂平には、“呢”の漢字語形が分布するが、音声表記は付されていない。おそらく[nɛ]か[nə]の近似音形と推定する。全南近隣の竜南には、“得” [tɛ]の語形が分布しているが、このことから[n]は[t]のさらに弱化が進んだ形式 (t>n) と分析できる。

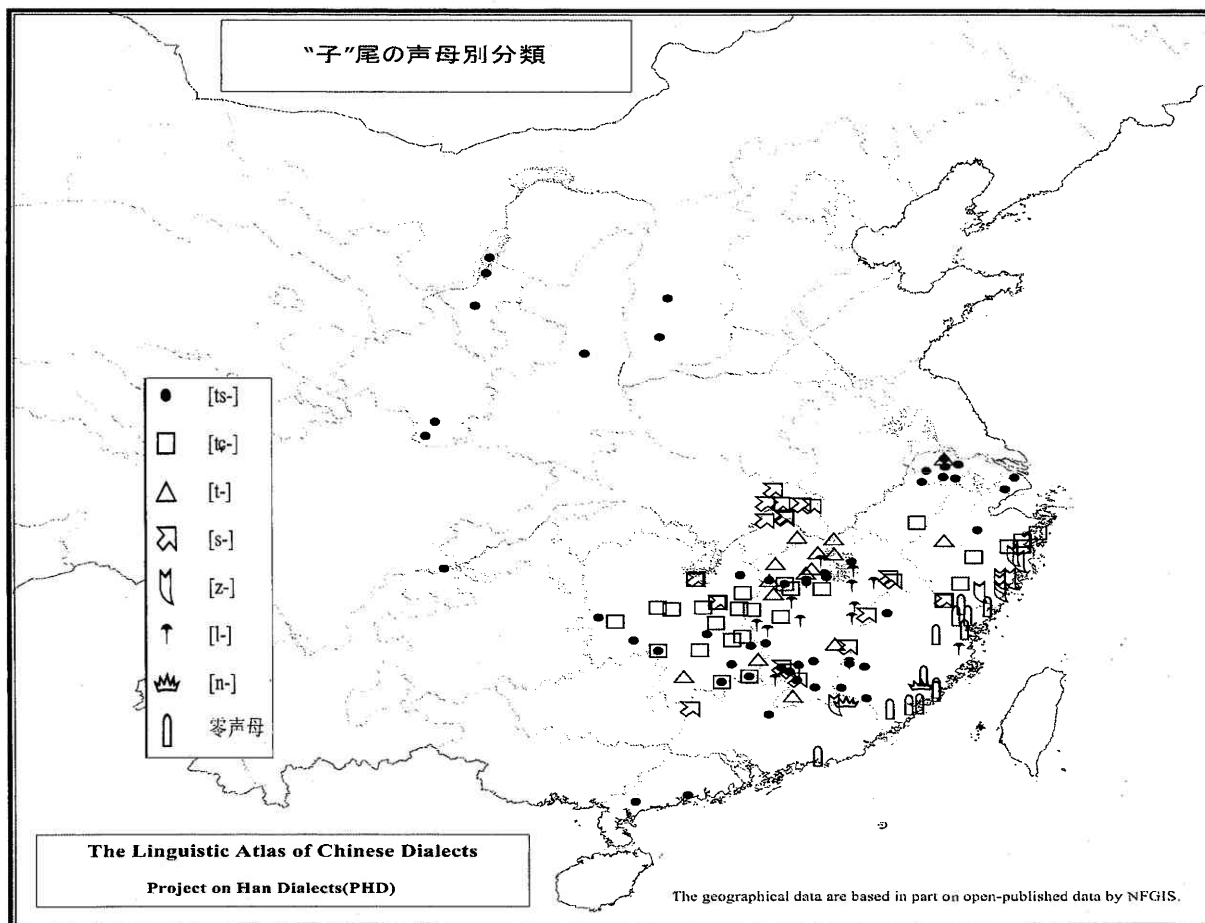
2. 8 零声母類

漢字表記	仔 得
声母	[∅] [k]
韻母	[iã][a][ã][ek][ik][i?]
分布地域	福建 広東

零声母とは、語頭声母がないことを意味するが ([∅]で示す)、ここでは[k]声母で始まる語形も含む。[k]声母は、現在のところ福建永春にのみ確認できているだけであるが、調査範囲を名詞接尾辞まで広げれば、おそらく他の地点においても確認できそうだ。永春では“仔”の漢字

語形が当てられ[kia̯]と発音されるが、この音形から“囡”に由来する語形と分析する。“囡”は『広韻』には収録されていないが、『集韻』に“閩人呼儿曰囡”の義注があり、閩方言では古くから“儿子”（息子）義の方言字として使われていたことが分かる。反切は“九件切”で、永春の[kia̯]はその音を忠実に継承していると言える。現在閩南方言に属する広東海豊、福建廈門や泉州では、[ã]と[a]の音形が分布するが、これらも“囡”に由来する語形と分析する(kiã > ã > a)。一方、閩東方言地域では“得”の語形が分布し、古田と福安では[ek⁵]、寧徳は[ik⁵]、寿寧、周寧、福鼎の3地点では[iʔ⁵~4]の音形で読まれるが、これらは“得”の単字音と一致しないため、“得”に直接由来する語形ではなく、単なる当て字かと思われる。単純に韻母の音形から、“子”或いは“仔”に由来する語形と分析する(*iə > e > ek 又は *iə > i > ik/iʔ)。

地図 1

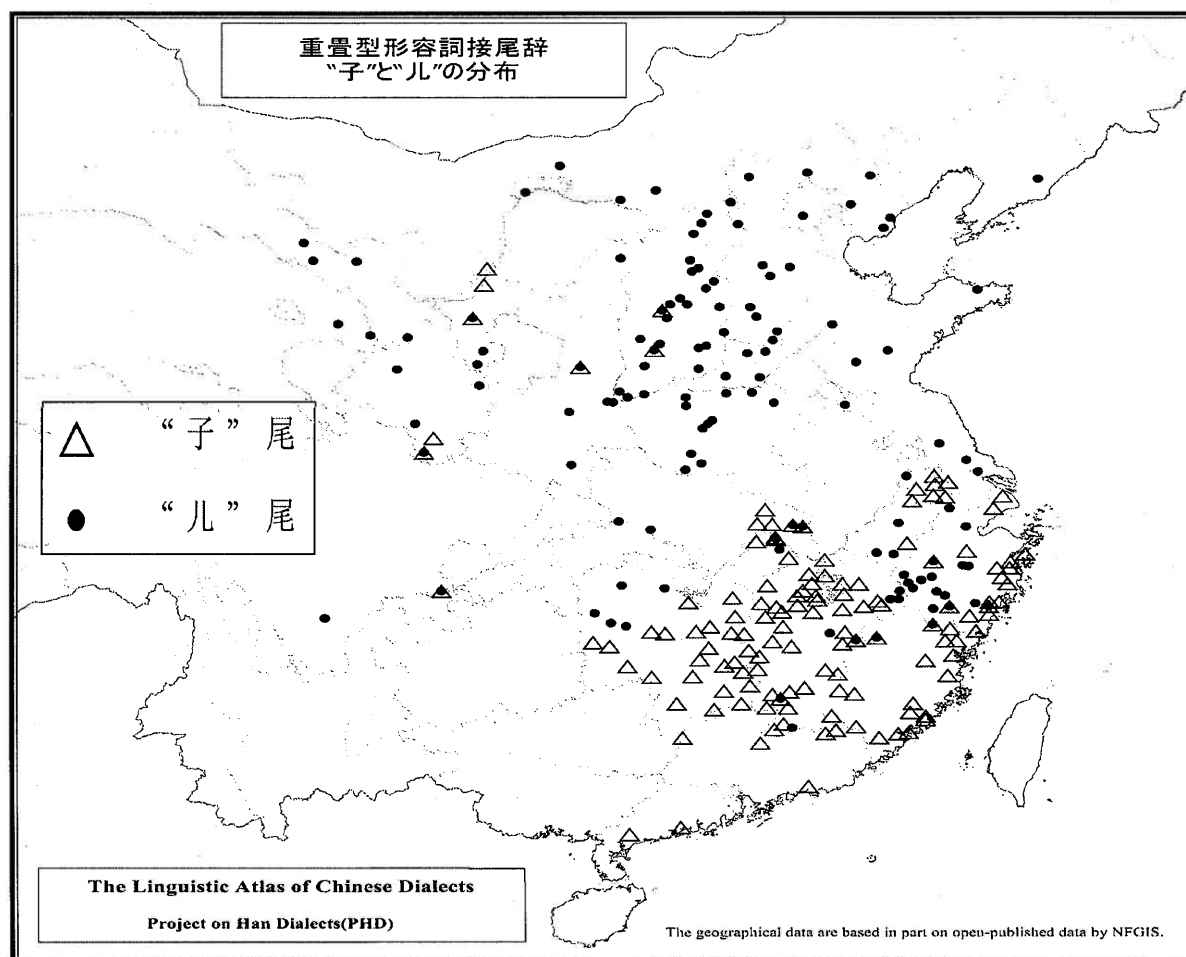


3. 文法的特徴

重畳型形容詞に後続する形態素の中で、“子”と“儿”に属する語形が最も多く分布していることが、拙論(2006)の分析で明らかになったが、両者の地理的分布を観察すると、中国南北で大きく対峙して分布していることが分かる(地図2)。“子”と“儿”は現代漢語において、

互いに“儿子”（息子）の意味を持つ上で同義語であり、接尾辞としての機能や意味の上でも重複する部分が多いが、重畳型形容詞接尾辞としての使われ方に、こうした方言間の差異が生じていることは非常に興味深い。本節では、“儿”尾との対照比較を通じて、“子”尾にどのような文法的特徴があるのか、文法機能と感情的ニュアンスの2点から論じてみることにする。

地図2



3. 1 文法機能

“子”尾が付加した“AA子”の文法機能は、方言によって様々である。ある方言では、状語、定語、謂語、補語のすべての位置に現れることができるが、ある方言では状語や定語の位置にしか現れないといった制約がある（拙論 2006）。こうした文法機能の違いから“AA”に後続する“子”尾は、以下3つの異なる形態素に分類できる：

- ①名詞化マーカ
- ②状態形容詞接尾辞
- ③副詞接尾辞

山西臨汾や万榮に分布する“AA子”は①に属する。山西臨汾や万榮に分布する“子”尾は、

単音節形容詞Aに後続するだけでなく、重畳型AAにも後続し、名詞化させる。例えば万榮方言の“肥肥子”や“旧旧子”はいずれも名詞であり、前者は“胖人”（太った人）、後者は“旧的東西”（古い物）の意味を表す。こうした“AA子”は、人を指す場合は蔑視のニュアンス、物を指す場合は「不本意である」といったマイナスのニュアンスを伴う¹³⁾。福建武平や江西南昌に分布する“AA子”は②に属し、文中において状語、定語、謂語、補語のすべての位置に現れることができる。いわば普通話の“AA儿的”に相当する形式であるが、定語になる際は必ず定語助詞“个”を伴わなければならない。寧夏同心の“AA子”，江蘇丹陽の“AA则”，浙江温州の“AA似”，福建泉州の“AA仔”などは③に属する。文中では状語の位置にしか現れない副詞で、普通話の“AA儿”に相当する形式である。

一方，“儿”尾にも“子”尾と同様、上述した3つの文法機能が含まれる。普通話には“儿”尾が重畳型AAと結びつき名詞化するという機能は見られないが、貴州遵義方言では、一部の形容詞性形態素の重畳型に“儿”尾が付加し、名詞化するという機能が報告されている¹⁴⁾。

よって文法上は，“儿”尾も“子”尾と同様の機能を有する接尾辞という扱いになるが、上述した①②③の諸機能をいずれの接尾辞で表すかは、方言によって異なるわけであり、北方方言では“儿”尾が使われるのに対し、客家、贛、湘方言等の南方方言では“子”尾のみが使われる傾向が強い。また晋語のように、①の機能は“子”尾、②と③は“儿”尾という具合に、両者の役割分担が存在する方言もある。つまりこうした“子”尾と“儿”尾の伴う機能の方言的差異が、“AA”に後続する接尾辞の地理的差異を生み出していると考ええる。

3. 2 感情的ニュアンス

“AA”に後続する“子”尾と“儿”尾は、ともに指小的意味を表すことから、「愛らしい、好ましい」といった感情的ニュアンスを伴う場合が多い。しかし“子”尾に伴うニュアンスは、必ずしも好意的なものばかりでなく、「残念である、不満である」といった否定的ニュアンスも伴う場合がある。湖北英山の“AA式儿”，湖南益陽の“AA斯”などがこの類に属するが、例えば益陽方言では，“咯号菜辣辣家姐，味道蛮好”（この料理辛いけど、おいしいよ）という場合と“咯号菜辣辣斯姐，你吃得惯啵？”（この料理辛いけど、食べられるの？）とでは、共通のAA（辣辣）が現れているが、後続する接尾辞によって、話者の異なる主観的評価（感情的ニュアンス）が表現できる。前者は“辣”（辛さ）に対し、プラス評価で「好ましい」といった好意的ニュアンスが含まれるのに対し、後者ではマイナス評価で「不満である」といった否定的ニュアンスが込められる¹⁵⁾。“儿”尾には、この“斯”尾に相当する否定的ニュアンスの付加という機能は含まれない。

つまり“子”尾と“儿”尾の意味的差異は、伴うニュアンスに“子”尾では好意的、否定的のどちらも含まれるのに対し、“儿”尾には好意的ニュアンスしか含まれないという点にある。“儿”尾は、否定的な意味を表す“AA”に付加すると、貶す意味がなくなり、否定的意味は好意的な意味へと変化する。しかし、その逆のパターンである好意的意味から否定的意味へ転化させるという機能は、今のところまだ発見できていない。

4. まとめ

以上、漢語方言における重畳型形容詞接尾辞“子”について、音声・音韻・文法の3つの側面から考察を行ったが、音声面では[ts/tɕ]声母の他、[t][s][z][l][n][k][ʃ]の7つの異なる声母が分布していることが観察できた。また韻母の語形や中古音の帰属から、分布語形は概ね“子、仔、崽、囡”のいずれかの漢字表記に祖形が求められると分析できた。つまり現在、様々な表記で示される語形は、“子、仔、崽、囡”のいずれかの語形の“変体”（変異形）であり、それらは弱化、口蓋化、促音化といった様々な音声変化を経て、現代音に至っていると考えられる。

“子”と“儿”は現代漢語において、互いに“儿子”（息子）の意を持つ上で同義の形態素と言えるが、“AA”に後続する接尾辞は、北方方言では“儿”が優勢であるのに対し、南方方言では“子”を多く用いる傾向が強い。これは方言によって“子”の伴う機能に違いがあることに起因する。しかし中には、“子”と“儿”のいずれもが併存しているといったケースもあり、接尾辞としての機能に、両者の区別が全く見られないという方言もある。例えば四川瀘州（瀘州市志 p.1305）では、“AA儿的”と“AA子”“AA子子”の3形式が分布する。また“式儿”や“势儿”といった“子”尾と“儿”尾との併合語形や、“经”[tʃiŋ]のような“子”尾の儿化語形も分布することから、“子”と“儿”が全く同じ機能を持つ形態素として認識されている方言もあることが分かる。

“AA”に後続する“子”尾と“儿”尾は、文法上共通の機能を有するが、付加する際に伴う感情的ニュアンスに両者の違いが見られる。“子”尾には“儿”尾には伴わない否定的ニュアンスの付加という機能がある。“子”尾と“儿”尾はともに「小さい」といった指小的意味を表すことから、「愛らしい、好ましい」といった愛称の意味に転じる場合が多いが、北方方言では“儿”尾だけが愛称の意味に転じるようになり、“子”尾にはその機能は備わらなかったと言う（王力 1958）。現在“AA”の末尾に、北方方言では“儿”尾のみが付加されるというのは、漢語史のこうした史実を裏付ける結果ともいえよう。

本研究は、平成 16—18 年度科学研究費基盤研究(B)“中国語方言の言語地理学的研究—新システムによる「漢語方言地図」の作成—”(研究代表者：岩田礼)において、林智氏(金沢大学文学部大学院生)が開発した言語データ・地図データ蓄積システム(PHD システム)を使用している。

尚、本稿は科研会議(2006年9月16日、於京都大学)で口頭発表した内容を加筆修正させたものである。口頭発表時のタイトルは次の通り：「形容詞接尾辞の“子”(子尾)について」

注

- 1) “儿”尾には“儿化”する語形も含まれる。
- 2) 音声別に分類した 11 のグループとは、[ts]類、[tɕ]類、[tɕi-]類、[s]類、[z]類、[n]類、[n-n]類、[l]類、[t]類、[k]類、[n/-r]類を指す(拙論 2004)。
- 3) 例えば湘南方言地域に分布する“唧”[tɕi]は、現代漢語の“儿”や“子”に相当する名詞接尾辞で、指小的意味を表す。例えば東安方言では、“麦子，鸟儿”を“麦唧，鸟唧”，汝城方言では、“钉子，婴儿”を“钉唧，细人唧”と表現する(罗昕如 2004《湘南土话词汇研究》中国社会科学出版社 pp.138-139 参照)。
- 4) 刘纶鑫 1999《客赣方言比较研究》中国社会科学出版社 pp.678-683 参照。
- 5) 中古音の推定音価は、王力 1958《汉语史稿》上册 科学出版社 p.163 に従った。
- 6) 徐慧 2001《益阳方言研究》湖南教育出版社 p.53 参照。
- 7) ここでは以下の名詞：桃子，梨子，柿子，李子，桔子，柚子における“子”に相当する語形のみを対象として述べている。李如龙・张双庆 1992《客赣方言调查报告》厦门大学出版社 pp.239-241 参照。“子”の単字音は同著 p.52 参照。
- 8) 平遠方言では“子”尾の声母は、陰声韻字と入声韻字に続く場合は[z]，陽声韻字に続く場合は[nz]となる(严修鸿 2001〈平远客家话的结构助词〉《语言研究》第二期 p.40)。ここでは陰声韻字と入声韻字に続いた音形を採用した。
- 9) 谢栋元 2002〈梅县客方言“子”尾、“儿”尾辨〉《客家方言研究》暨南大学出版社 p.381 参照。
- 10) 福州方言では“式”の声母は、陰声韻字に続くと[l]，陽声韻字に続くと[n]，入声韻字に続くと[t]になる(陈泽平 1998《福州方言研究》福建人民出版社 p.120)。ここでは陰声韻字に続いた音形を採用した。
- 11) 安溪方言では、“仔”は状語マーカとして機能する(安溪縣志 p.1164)。泉州方言においても“仔”は普通話の“儿”や“地”に相当する形態素である(李如龙 2001〈闽南方言的结构助

词)《语言研究》第二期 p.51)。

12) 安溪方言においても“子”尾声母の同化現象が見られる。陰声韻字に続くと零声母，陽声韻字に続くと[n m ŋ]，入声韻字に続くと[p t k]となる(蕉岭县志 p.653)。本稿では“唔慢慢□食”の例文中“□”に当てられた音形[ne] (-n 韻尾に同化した音形)を採用した。

13) 万榮方言については，吴建生 1997〈万榮方言的“子”尾〉《语文研究》第二期 p.51 参照。

14) 胡光斌 2005〈遵义方言儿化的分布与作用〉《方言》第一期 p.67 参照

15) 益陽方言の例文は徐慧 2001《益陽方言语法研究》湖南教育出版社 p.227 を参照。また当方言の“AAX”については，拙論 2005 において観察済みである (p.7)。

参考文献

朱德熙 1982《语法讲义》商务印出版社

王力 1958《汉语史稿》(参照したのは同著の修訂版，中华书局，1982)

拙論 2004「中国諸方言における形容詞“AAX”について(1) — “X”の形態的特徴」
『近畿大学語学教育部紀要』第3巻第2号 pp.69-82

—— 2005「中国諸方言における形容詞“AAX”について(2) — その文法的特徴」
『近畿大学語学教育部紀要』第5巻第2号 pp.1-21

—— 2006〈汉语方言单音形容词重叠后缀的地理分布及类型 — 以“子”尾为例〉
『開篇』vol.25 好文出版 pp.159-168

資料：各語形の音形と漢字表記及び分布地点

ここでは音声表記の有する語形のみ列挙している。声調は調類で示す。I II III IVはそれぞれ平上去入を指し，a bは陰陽の別を指す。0は轻声を意味する。尚，調類が不明な場合は，何も記していない。

[ts-]類

[tsɿ] “子” 山西临汾 汾阳|新疆乌苏|宁夏吴忠 银川|江西南昌 井冈山 上犹 南康 波阳 于都|湖南酃县 武冈 衡阳

“仔” 江苏宝山 金山|浙江诸暨 [tsɿ^{Ia}] “子” 福建武平 “兹” 广东翁源 [tsɿ^{IIa}] “子” 江西三都 赣县

[tsɿ^{III}] “子” 湖南芷江 [tsɿ^{IIIa}] “仔” 上海 [tsi] “子” 福建永定 [tsi] “子” 江西铜鼓 “唧” 湖南安仁

[tsu] “子” 江西安高 [tsu] “子” 湖南平江 [tsə] “子” 江西宜丰 [tsə^{IIa}] “子” 福建邵武

[tse] “子” 江西铜鼓 “崽” 江西安远 [tse] “者” 湖南邵阳 [tse] “嘖” 湖南邵阳

[tsei^{Ia}] “仔” 湖南资兴 [tsei] “仔” 湖南宜章 [tsai^{II}] “子” 福建连城 [tsai] “崽” 湖南东安

[tsæ^{IVa}] “则” 江苏丹阳 [tsəʔ] “则” 江苏溧水 “嘖” 湖南平江

[tɕ-]類

[tɕi] “子” 湖南汝城 “唧” 湖南东安 新化 浏阳 涟源 “几” 湖南常宁 黔阳 | 江西上高 萍乡 “叽” 江西丰城 安福
 “叽机” 湖南衡山 “积” 湖南茶陵 醴陵 “记” 浙江三门 [tɕi^{II}] “唧” 湖南湘乡 [tɕi^{IIa}] “积” 江西宜丰
 [tɕei] “子” 广东阳江 [tɕiŋ] “经” 浙江云和 [dzi] “忌” 浙江永康 [tɕie⁰] “姐” 湖南益阳 “仔” 湖南
 宜章 “叫” 安徽绩溪

[t-]類

[te⁰] “仔” 湖南桂东 “得” 江西德安 “嘚” 江西安义 都昌 [te^{Ia}] “端” 浙江建德 [te^{IV}] “得” 湖北阳新
 [te] “子” 江西铜鼓 [ty^{II}] “子” 湖南宁远 [ty⁰] “子” 江西修水 [tə⁰] “子” 湖南宁远 [tæŋ^{IVa}] “得”
 江苏丹阳

[s-]類

[sɿ] “式” 江西上犹 “势” 湖北武昌 江西铅山 [sɿ^{Ia}] “斯” 湖南益阳 [sɿ^{IIIa}] “式” 湖北鄂州 湖南韶山
 [ɕi?] “式” 江西黎川 [ɕi^{IIb}] “是” 浙江庆元 [sɿ] “式” 湖北英山 “势” 湖北红安 [ʃi^{IIIb}] “是” 广东连山

[z-]類

[zɿ^{IIb}] “似” 浙江温州 [zɿ] “子” 广东平远 “氏” 浙江永嘉 瑞安 临海

[l-]類

[li] “仵” 江西永修 新余 南丰 东乡 莲花 安高 “哩” 江西永新 吉水 新余 余干 南城 [li?] “仵” 江西贵溪
 [læ⁰] “哩” 江西大余 [le] “咧” 福建长汀 [le^{IIIa}] “哩” 福建长汀 [lei^{IVa}] “式” 福建福州

[n-]類

[na^{III}] “仔” 福建安溪 [ne^{Ia}] “口” 广东焦岭

零声母類

[kiã^{II}] “仔” 福建永春 [a^{IIa}] “仔” 福建厦门 泉州 [a] “仔” 福建晋江 [a^{II}] “仔” 福建平和 龙海
 [ã^{IIa}] “仔” 广东海丰 [ek^{IVa}] “得” 福建古田 福安 [ik^{IVa}] “得” 福建宁德 [iŋ^{IVa}] “得” 福建寿宁 周宁 福鼎